

### 33. 脳血管障害急性期に対する Fluosol と高気圧酸素併用療法の有用性 —rCBF と EEG フーリエの変化—

岩渕 崇 遠藤英雄 鎌田 桂  
齊木 巖 金谷春之

(岩手医科大学脳神経外科)

【目的】発作後2週間以内の急性期脳血管障害に対し、高気圧酸素療法(OHP)単独と及びそれに加え酸素溶解能に優れた Fluosol DA20 (FDA20) 併用の効果を局所脳循環(rCBF)、脳波フーリエ解析にて比較検討したので報告する。

【対象と方法】疾患別では高血圧性脳出血7例と脳梗塞4例、計11例である、このうちOHP単独治療群は6例であり、うち3例に治療前後のrCBF測定を施行し、5例では治療前・中・後のEEGフーリエ解析を行った。OHP+FDA20併用治療群は5例で、全例にrCBFとEEGフーリエ解析を行い、うち2例には減圧時マニトールを使用し、非使用の3例と比較した。rCBF測定には、 $^{133}\text{Xe}$ 吸入法によるSingle Photon Emission CT、EEGフーリエ解析には日立社製FFT analyzerを用いた。

【結果】(1)OHP単独治療群：治療直後のrCBFは病側3.2%、健側2.8%と殆ど不変である。EEGにおける $\alpha$ 帯のamplitudeの総和は治療前・中・後では、それぞれ病側14.8mV、16.1mV、14.4mVであり、健側は17.4mV、18.3mV、16.3mVと病健側とも治療中に1mV前後の増加をみとめたが、治療後は治療前に戻る傾向を示した。(2)OHP+FDA20併用群：治療直後のrCBF変化率は病側5.1%、健側3.9%と有意の変化ではないが、OHP単独群に比べ変化率は大きい。 $\alpha$ 帯のamplitudeの総和は治療前・中・後においてそれぞれ、18.1mV、23.0mV、19.3mV、健側はそれぞれ19.8mV、21.0mV、20.1mVであり病側の増加が著しいが、治療後は治療前に復する傾向を示した。

【まとめ】OHP単独治療に比べ、OHP+FDA20併用治療では治療直後のrCBF変化がやや大であり、EEGでは治療中の病側における改善度が著明である。従って以上の所見は併用治療の有効性を示唆すると考えられるが、今後症例を増やしさらに検討を重ねたい。

### 34. 脳梗塞に対する OHP の効果

鎌田 桂\*<sup>1)</sup> 金谷春之\*<sup>2)</sup> 小笠原孝司\*<sup>1)</sup>  
藤田幸治\*<sup>1)</sup> 遠藤英雄\*<sup>2)</sup> 岩渕 崇\*<sup>2)</sup>

〔\*<sup>1)</sup>岩手医大高気圧環境医学治療室〕  
〔\*<sup>2)</sup>同 脳神経外科〕

【目的】脳梗塞に対する高気圧酸素療法(OHP)については既に確立された観があるがその適応についてはまだ細部に検討されていない部分のみられ以下の方法によって適応の検討を行った。

【方法】1982年4月より1986年3月までの4年間でOHPを行った脳梗塞例は58例で、このうち意識障害、運動障害、言語障害の改善を目的としてOHPを行った42例について、発症からOHPまでの期間、回数、CTの低吸収域の拡がりについて検討した。

意識障害はJCSにより2段階以上の改善を示したものを著効、1段階のものを有効、不変のものを無効とした。運動障害はBrunnstrom、上田の分類により2段階以上の改善を示したものを著効、1段階のものを有効、不変のものを無効とした。言語障害は全失語より運動または感覚失語となったもの、両失語または構音障害が消失したものを著効、運動または感覚失語が軽度になったものを有効とした。

【結果】意識障害は、著効15(57.5%)、有効6(23.1%)、無効5(19.2%)：運動障害、著効11(28.2%)、有効15(38.5%)、無効13(33.3%)：言語障害、著効8、(25.8%)有効10(32.3%)、無効13(41.9%)。発症から1ヶ月以内にOHPを行ったうち著効例は意識障害35.7%、運動障害29.6%、言語障害27.3%であり、OHPの平均回数は13回であった。一方1ヶ月以上では22.1回であった。

意識障害に著効をみたものではCTで1例を除いて皮質部の低吸収域を認めるか水頭症を認めた。運動障害に著効をみたものでは皮質部又は基底核の2.5cm以下の低吸収域を認めた。言語障害ではCTの低吸収域に一定の傾向は認めなかった。